

1 造語責任を感じながらヒヤヒヤする

「福祉的自治集団」「来歴のストーリー」が今回の基調のキーワードとなっている。この言葉を私が使ったときは、所詮実践家、研究者でもないのに、自分の感覚に合っていればいいやないか程度の気持ちで使っている。大きく取り上げられてヒヤヒヤしている中でこれを書いている。

2 福祉的自治集団について

実際の文面は次の通りである。(前回京都大会基調報告京都版より)

「**民主的組織リーダーとしてのリーダー観と、福祉的自治集団のリーダー観は、かなり違うのではないだろうか。民主的組織リーダー観は、集団の非民主的な事柄に批判的に介入するものであり、集団の外から集団を指導するイメージがある。それゆえに、このようなリーダーには、「核としての孤独」を抱きながら、先進性・戦闘性・組織性・大衆性・実務性・楽天性などを兼ね備える個人をイメージする。しかし、福祉的自治集団のリーダーは、「K」の息苦しさを教師の指導を通して理解し、息苦しきの二次的背景となっている学校の抑圧や、友達からの排除による抑圧等を知的に理解し、それらに自分も影響を受けながら生きてきた事実と向き合いながら、リーダーとして立ち現れるのである。柔軟性・共感性・慎重さ・冷静さ・強靭さなどをもつ個人がイメージできるであろう。学級にこのようなリーダーが立ち現われ、学級が、「K」を含む困難を抱えた仲間の理解に立ちながら、真に共同して生活をつくり出す福祉的自治集団となったとき、そして、そのような学級の中で彼ら・彼女らと共に生きる時こそ、教師としての本当の生き甲斐・やりがいがある心の深みからふつふつと湧き上がってくるのである。」**

Kへの教師の個人指導(ケアと応答の関係から批判と援助の関係へ)を軸にした集団指導によって導かれる集団のイメージは、漠然と「福祉的自治集団」と表現するのがいいとこのときに思っている。この時点では集団イメージより、リーダー観の違いの方が私には鮮明であった。こう思い返すとき、基調が取り上げている兼田実践の大地は興味深い。大地がどんな子なのか、大地と兼田の思想的対話はどのようなものだったのか、兼田の意識的の大地へのアプローチがあったのかそれとも自然発生的に育ったリーダーなのか。この点は是非明らかにしたい。意識的核指導のないところに集団づくりの科学性はないのだから。これは「京都の実践は核づくりだ」という熊本の白石先生の指摘と呼応する。

3 来歴のストーリーについて

実際の文章を引用する(機関誌Kの世界 牧本実践の分析)

「**達也の暴力性は、暴力により相手を屈服させようとする達也と、暴力によって屈服させられてきた惨めな達也が同居する。牧本さんが出会ってからの様々な出来事もこのストーリーの中に位置付けて分析し、達也の行動と指導の結果による達也分析を付け加えていく。これは終わることのない作業である。(中略) 来歴のストーリーは起こった状況・事象を縦に並べるが、それは見えるストーリーである。見えるストーリーによって達也の内面にどのような発達のゆがみが生じたのか、その外からは見えない内面のストーリーを関連付けて描くことが重要である。この両方の関連性の変化を来歴のストーリーとする。(達也の来歴のストーリーを図式化する)**

来歴のストーリーが描ければ、改善・成長のストーリーも描くことが出来る。いや来

歴のストーリーが描けない教師に改善・成長のストーリーは描けないのである。

成長のストーリーは来歴を逆にたどることを原則としつつ、全局面を視野に入れて指導を始める。そしてその成果は来歴通りの順に現れるとは限らないことを知るべきである、さもなければ段階論的指導に陥って実践が停滞する。牧本さんは経験豊富な実践家である。**来歴のストーリー**はすでに頭の中にある。」

はっきり自覚していることは、成長のストーリーを描くために来歴のストーリーを描くということである。そして成長のストーリーの中に学級の「寄り添える仲間」「核と核集団」「良心的支持層」「消極的支持層」「排除空気の核となる新自由主義的核」たちが登場するということである。

研究部からは、昨年度より集団指導の進行表が常任委員会では私案として提起された。時期尚早として昨年度は基調に反映しなかったと思う。今年1年間、来年の京都大会に向けて研究部の課題になる。次につながるいい基調とおもう。

4 「来歴のストーリー」にこだわってきた私の来歴

「排除は教育ではない」このフレーズに、非行問題に向き合いはじめたころ以来こだわり続けてきた。私も排除へと傾きかける自分を感じる時がある。それは指導の困難さによって発生するが、改善の見通しが立たない不安感や子どもからの傷つきによる。さらには親や職場の無理解が拍車をかけることもある。

こんな時、私を支えるのは彼、彼女が抱えるこれまでの苦悩を今一度深く見つめ直す作業である。ぶれない私を支えるのが「来歴のストーリー」。「成長のストーリー」は私が前を向く勇気を与えた。

教員を退職し、行政の中で子どもの支援に関わるようになって8年目である。いま、9人の支援を抱えている。いま私の中に発生する「排除への傾き」の危機は、子どもの携帯がつかまらない、ラインが既読にならない時である。子どもの拒否にさらされる時のいらだちの裏に「排除への危機」を自覚する。(イラチ過ぎかもしれないが)

先日も携帯不通、ラインが既読にならない少年の家に夜の9時から出かけた。母親に起こされて眠そうな少年に「携帯切るな、ライン見ろ！」というと、ゲーム中に携帯を切る癖が直らないことを謝った。「もう帰る、用件はライン見ろ！お前がライン見る、携帯切らなければ、こんな時間に来る必要もなかったんやで！」と帰る。帰り道、ホットしてる自分がある。排除に傾きそうな出来事を放置しない、放置できない自分を支えるのが来歴のストーリーづくりである。

子どもと面談する様子を見た母親が、「先生にもあんな態度なんですか？ちゃんと聞いてないですね！」という。『返事して、頷いて、ちゃんと聞いてるよ！聞いてることと、言われた通りに行動できるかは別よ！』と穏やかにかえしながらも、『あんたには会話も拒否してるやんけ』と心の中で叫ぶ！この母親のような声やまなざしが若い先生に対する、職場の空気としてあるのだろうと思う。それが「排除」への傾きを知らず知らずにつくってしまうのだろうと思う。この母親も彼の来歴のストーリーの中に色濃く登場しているわけで、成長のストーリーにおいても「少年の苦悩への共感を育て」「社会規範を尺度にした厳しい評価から変化・成長の絶対評価の獲得」を課題にした重要な登場人物である。母親側の価値観（学校側の価値観）にぶれることもなく、子どものそばに居続ける為にも成長のストーリーがある。